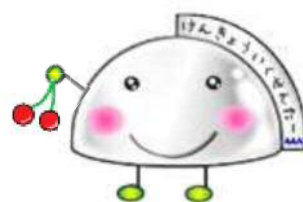


特別支援学級ハンドブック別冊

知的障がい特別支援学級における 自立活動の実践事例集

山形県教育センター





はじめに

山形県では、多くの小学校・中学校・義務教育学校に知的障がい特別支援学級が設置されており、児童生徒の特別なニーズに応じた教育が行われているところです。その中で、担任の先生方から、知的障がいのある児童生徒の自立活動の授業づくりに悩む声が多く寄せられています。

そこで、授業づくりの手がかりとなる、実践事例集の作成が必要であると考え、県内の知的障がい特別支援学級担任の先生方より御協力いただき、本事例集を作成いたしました。貴重な実践事例を提供いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

本事例集が知的障がい特別支援学級における自立活動の授業づくりの一助となり、子供たち一人ひとりのより良い成長につながれば幸いです。

※ 本事例集では、対象児童生徒の個人情報保護の観点から、実践校名及び実践者名を掲載していません。御了承ください。

御質問・御意見等につきましては、山形県教育センター 特別支援教育課まで御連絡ください。

山形県教育センター 特別支援教育課

TEL 023-654-2155 (代)

FAX 023-654-2159



目 次

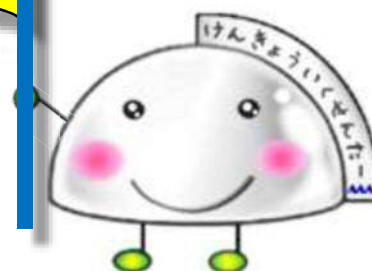
事例 番号	自立活動のねらい	ページ
1	身近な人とかかわる中で、必要な支援を受けながら自分の気持ちを表すことができる。	1
2	教師の助言を受けながら、落ち着いて行動したり、穏やかにやりとりをしたりすることができる。	4
3	集団の中で進んでコミュニケーションを図れるようにするために、自分に自信を持って、生活や学習に取り組むことができる。	9

☆ 事例1～3は自立活動の流れ図※あり

※「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編(幼稚園・小学部・中学部)」(平成30年)参照

事例 番号	自立活動のテーマ	ページ
4	自分に合ったコミュニケーションの方法を知り、他者とかかわる力を育てる。	12
5	自己肯定感や意欲的に取り組む態度を育てる。	14

自立活動



事例1

知的障がい特別支援学級における自立活動の実践

1 自立活動の流れ図 ※「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編（幼稚園・小学部・中学部）」（平成30年）参照

校種〔 小学校 （ 下学年 上学年 ） 中学校 〕

実態把握	① 障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所やよき、課題等について情報収集					
	・知的障がいの程度は軽度であり、国語は2学年下、算数は3学年下の内容を学習している。 ・興味のあることには意欲的に取り組むことができるが、初めてすることや久しぶりにすることについては、取り組むことに抵抗をもったり、なかなか集中できなかったりする。 ・相手の気持ちをおしはかったり、ゆずったりすることは苦手である。 ・目で見えていないものを言葉だけで理解する事が難しい。 ・人とかがかわることが好きだが、自分がしたいことや困っていることを自分から言葉で相手に伝えることが難しい。 ・リズム感が良く、歌や踊りを覚えることが得意である。 ・言うことが決まっていることや知っていることは自分で話すことができる。					
	②-1 収集した情報（①）を自立活動の区分に即して整理する段階					
	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
		・初めてすることや久しぶりにすることについては、取り組むことに抵抗をもったり、なかなか集中できなかったりする。 ・活動の見通しがもてないと不安になる。	・相手の気持ちをおしはかったり、ゆずったりすることは苦手である。 ・人とかがかわることが好きだが、自分がしたいことや困っていることを自分から言葉で相手に伝えることが難しい。	・目で見えていないものを言葉だけで理解する事が難しい。	・リズム感が良く、歌や踊りを覚えることが得意である。 ・腕や指先の力が弱く、腕での姿勢保持やキャップの開け閉めなどが難しい。	・人との距離感がつかみづらい。 ・言うことが決まっていることや知っていることは自分で話すことができる。
	②-2 収集した情報（①）を学習上又は生活上の困難や、これまでの学習状況の視点から整理する段階					
	・経験のあることや見通しのもてる活動には集中して取り組むことができる。（心・環） ・新しい環境や人間関係には不安になりやすく、活動に消極的になる。（心・人） ・相手に意思を伝えようとするが、言葉遣いが拙いため十分に伝わらず気持ちが落ち込むことがある。（心・コ） ・視覚的な情報には理解を示すが、目に見えない事象、心情や背景を想像することが難しい。（環・コ）					
	②-3 収集した情報（①）を〇〇年後の姿の観点から整理する段階					
	・将来、社会生活を送るために、相手の感情を理解したり、自分の要求を伝えたりして、良好な人間関係を形成できること。（人・コ） ・周りのペースを見て、声がけなどの支援を受けながらも、自分で判断して行動できること。（人・環） ・自分の得意なことを伸ばし、周りから認められ、自分に自信がもてるようになること。（心・人）					

指導すべき課題の整理	③ ①をもとに②－1，②－2，②－3で整理した情報から課題を抽出する段階 ・言葉や表情から、相手の気持ちを読み取ることが難しい。(人・環・コ) ・困ったことに直面した時に、他者に援助を求めることが苦手である。(人・コ)
	④ ③で整理した課題同士がどのように関連しているかを整理し，中心的な課題を導き出す段階 児童は、相手の気持ちをおしはかたりゆずったりすることが苦手であり、周りの友達や教師と仲よくなりたいという気持ちがありながらも、対話経験の少なさや恥ずかしさ、断られるかもしれないという恐れなどから、自ら人間関係を築くことに抵抗が見られる。したがって、身近な人とかかわる中で、自分の気持ちを表すことを中心的な課題とし、心理的な安定を図ることや人間関係の形成など、他と関連付けながら指導を行うことが必要である。

⑤ ④に基づき設定した指導目標（ねらい）を記す段階

課題同士の関係を整理する中で今指導すべき目標として	・身近な人とかかわる中で、必要な支援を受けながら自分の気持ちを表すことができる。
---------------------------	--

⑥ ⑤を達成するために必要な項目を選定する段階

指導目標を達成するために必要な項目の選定	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
		(3) 障害による学習上又は生活上の困難を克服する意欲に関すること	(2) 他者の意図や感情の理解に関すること			(2) 言語の受容と表出に関すること (5) 状況に合わせたコミュニケーション

項目間の関連付け	⑦ 項目と項目を関連付ける際のポイント
	・「相手の意図や感情を読み取るために」(心)(3)と(人)(2)と(コ)(5)とを関連付けて設定した具体的な指導内容が、⑧アである。 ・「良好な人間関係を形成するために」(心)(3)と(人)(2)と(コ)(2)とを関連付けて設定した具体的な指導内容が、⑧イである。

⑧ 具体的な指導内容を設定する段階

選定した項目を関連付けて具体的な指導内容を設定	ア 相手の気持ちを想像して、適切な表現ができるように、相手の話を受けて自分の気持ち、思いを言語化する経験を積み重ね、自分の表現活動に自信をもてるようにする。	イ 少人数の安心できるグループの中で、人とかかわる自信と意欲を育てながら、話し合ったり協力したりして活動に取り組めるようにする。
-------------------------	--	--

2 実践事例

(1) 単元・題材名

入学おめでとう会をしよう

(2) 指導・支援の実際

本単元では、高学年女児を対象児童（A児）とした。今年度から肢体不自由特別支援学級が新設され、1年男児（B児）が入級した。知的障がい特別支援学級と自閉症・情緒障がい特別支援学級の児童が合同でB児を歓迎する「入学おめでとう会」を開くことにした。入学おめでとう会を計画する段階では、A児と、同じ学級に在籍する女児（C児）および自閉症・情緒障がい特別支援学級の男児（D児）の3名で話し合い活動を行った。A児の意見がなかなか出てこないときには、A児の様子から推測される意見をいくつか示し、その中から選択するようにした。話し合いでは、どのようにすればB児が楽しめるかを念頭に置いて意見を出すようにし、相手意識をもてるように指導した。

B児が好きなものや好きな色などを事前にインタビューし、それを考慮した活動やプレゼントを考えられるようにした。入学おめでとう会では、学級にB児を招き、自己紹介クイズやプレゼントなどを行った。その後、A児はB児に自分からあいさつや声がけをするようになった。

(3) 配慮事項

知的障がい特別支援学級と自閉症・情緒障がい特別支援学級の3人全員で学習する機会は少ないが、みんなで学習する活動については、全員が最後までしっかり参加することができる。昨年度は、ハロウィンパーティー、クリスマス会、知的障がい特別支援学級の6年生へのありがとう会を経験した。昨年度の6年生が、下学年に対して手を貸したり注意したりして理想的な態度を見せてくれていた。そのため、下級生に対する望ましい態度を理解していると思われる。この単元では、B児のことを考えた思いやりのある行動を実践できるよう配慮した。

A児は、人とかかわることが好きだが、初対面の人や相手によって会話をするにやや消極的になることがある。そのため、身近な教師や同じ学級の児童同士の慣れ親しんでいる人間関係の中で対話や話し合い活動を行い、児童の心理的安定を図りながら徐々に人間関係を広げていけるようにした。活動の見通しがもてないと不安になることがあるため、単元のはじめに活動の順番や準備表を掲示し、活動が終わるごとに印をつけていくことで進捗状況を視覚的に理解できるようにした。

3 評価

(1) 成果（○）・課題（▲）

- 本単元の中において、児童同士が積極的に話す姿が見られた。学年での交流学习ではあまり見られない姿であり、そのような姿を引き出すことができてよかった。
- A児も、出された意見を一緒に読む、うなづくなどの形で参加できており、どんな言葉を書きたいのかを真剣に考えるなど、活動に前向きな様子が見られた。
- 単元全体において、常にB児が楽しめるようにするにはどうすればいいかという相手意識をもって活動できていた。
- ▲話し合い活動の中で、児童の役割分担と台詞の順番決めなどに時間を要してしまうことがあった。その後の意見交流に時間をかけて話し合いを充実させたかった。

(2) 今後の取り組み

- ・教師とA児は対話できているので、児童同士でも対話がつながるようにしていく。
- ・身近な人間関係を充実させることで、自信をもって新しい人間関係を築けるように支援していく。
- ・日常生活での感情表現や意思決定の場面で、A児の様子から推測される選択肢を提示し、決定することを繰り返すことで、少しずつ自分で考えて行動できるように支援していく。

事例2

知的障がい特別支援学級における自立活動の実践

- 1 自立活動の流れ図 ※「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編
(幼稚園・小学部・中学部)」(平成30年) 参照

校種〔 小学校 (下学年 上学年) 中学校 〕

実態把握	① 障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所やよさ、課題等について情報収集					
	・児童Aは、視覚からの情報を理解することが得意である。 ・好き嫌いなく何でも食べ、身体が丈夫で、病気にかかりにくい。体を動かして元気に遊ぶ。 ・パターンを覚えると、算数の計算や簡単な図形の描画を素早く行うことができる。 ・英語の単語やアルファベットに興味があり、進んで覚えようとする。 ・廊下を走る、気に入ったものは何でも取ってしまうなど、集団のルールや約束を守ることが難しい。 ・教師や友達の話を中心して聞くことが難しい。話の途中でも、自分が思ったことをすぐに声に出して話してしまう。また、言葉の意味を理解することが難しい。 ・一方的な会話になりがちである。自分の要求や思いを言葉でうまく表現することが難しい。 ・初めての活動に対しては、消極的になることがある。 ・自分の感情をストレートに乱暴な言葉で友達に伝えてしまい、トラブルになることが多い。 ・周囲の物音に過敏であり、不快感を表したり、気持ちが不安定になったりする。 ・ゲームの勝敗や、行動の順番にこだわり、思い通りにならないとイライラする。 ・国語や算数などの学習の時間、自分や友達が間違えると敏感に反応する。丸をもらえないと、大声を出したり筆記用具を投げたりする。 ・絵を模写したりイメージして描いたりすることが難しい。					
	②-1 収集した情報(①)を自立活動の区分に即して整理する段階					
	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	・健康状態はほぼ良好である。 ・視力が低下している。	・思い通りにならない時に情緒が不安定になる。 ・見通しが持てないと不安になる。	・自分の感情を陰しい言葉で相手に伝えてしまう。 ・相手の話をよく聞かず一方的に話してしまう。	・集中して話を聞くことが難しい。 ・視覚から情報をとらえることが得意である。	・日常生活動作はほぼできる。	・自分の気持ちを正しく伝えることが難しい。 ・会話の内容や状況の理解に合わせた受け答えが難しい。

実態把握	②-2 収集した情報(①)を学習上又は生活上の困難や、これまでの学習状況の視点から整理する段階
	・興味を惹かれるものがあると善悪を考えずに衝動的に行動してしまい、集団のルールや約束を守ることができずにトラブルになる。 ・自分の気持ちを抑えることができない。不満やくやしさを不適切に外に向けてしまっている。 ・聴覚より視覚優位であるため、話を聞くだけではなかなか内容を把握できない。断片的に判断して誤った行動をしてしまうことがある。 ・自分の思いをまとめて伝えることができず、感情的に、一方的に話してしまいがちである。
指導すべき課題の整理	②-3 収集した情報(①)を〇〇年後の姿の観点から整理する段階
	・将来、円滑な集団生活を送るために、集団のルールや約束を守って過ごすことができること。 ・自分の思い通りにならない時に、我慢したり自分で気持ちを落ち着かせたりする方法を身につけること。 ・他人の話を最後まで聞くことや、話す内容を理解してやりとりを行うなど、状況に応じたコミュニケーションの方法を段階的に身につけること。
指導すべき課題の整理	③ ①をもとに②-1, ②-2, ②-3で整理した情報から課題を抽出する段階
	・自分が興味をもった行動を優先してしまい、ルールを守ることができない。(人) ・気持ちが高揚した時に、気持ちを落ち着かせる方法を身につけていない。(心) ・他人と話すときの基本的な聞き方、話し方などが身につけていない。(人) ・自分の思いを他人に適切に伝える力が身につけていない。(こ) ・視覚的な情報処理能力と比べて聴覚的な情報処理能力が弱い。(環)
指導すべき課題の整理	④ ③で整理した課題同士がどのように関連しているかを整理し、中心的な課題を導き出す段階
	・興味や関心が広がってきているが、生活や学習活動の中で本児の思い通りにならないことが多くなり、ストレスになっている。約束を忘れたり、気持ちのコントロールの仕方を身につけていなかったりするため、不適切な行動をしてしまう。他者からの助言を受け入れられる関係作りをしながら、経験を積む中で社会性を育てていくことが大切である。 ・基本的な話の聞き方の未熟さ、場面理解の難しさなどからコミュニケーションがうまく成り立たなくなっている。視覚から情報を得る力を生かし、具体的な場面でのやりとりの仕方を指導していくことが大切である。
⑤ ④に基づき設定した指導目標(ねらい)を記す段階	
課題同士の関係を整理する中で今指導すべき目標として	・教師の助言を受けながら、落ち着いて行動したり、穏やかにやりとりをしたりすることができる。

事例2

知的障がい特別支援学級における自立活動の実践

⑥ ⑤を達成するために必要な項目を選定する段階

指導目標を達成するために必要な項目の選定	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
		(1) 情緒の安定 (2) 状況の理解と変化への対応	(1) 他者とのかかわりの基礎 (2) 他者の意図や感情の理解 (3) 自己理解と行動の調整	(2) 感覚や認知の特性についての理解と対応 (5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成		(1) コミュニケーションの基礎的能力 (2) 言語の受容と表出 (4) 言語の形成と活用 (5) 状況に応じたコミュニケーション

項目間の関連付け	⑦ 項目と項目を関連付ける際のポイント
	・＜集団のルールを守ることができるように＞（心）（2）、（人）（1）（2）、（環）（2）（5）を関連付けて設定したのが⑧のア ・＜気持ちを落ち着かせることができるように＞（心）（1）（2）、（人）（3）、（コ）（2）を関連付けて設定したのが⑧のイ ・＜穏やかにやりとりができるように＞（人）（2）（3）、（環）（5）、（コ）（1）（2）（4）（5）を関連付けて設定したのが⑧のウ

⑧ 具体的な指導内容を設定する段階

選定した項目を関連付けて具体的な指導内容を設定	ア	イ	ウ
	学習や生活場面で、教師の助言を受けながら、学校のルールや約束を意識して、守れるようにする。	気持ちが不安定になった時は、決められた場所に行き、深呼吸をするなどして、落ち着くことができるようにする。	様々な場面でのロールプレイを経験し相手の気持ちを理解することで、穏やかな口調で相手とやりとりができるようにする。

2 実践事例

(1) 単元・題材名 友達と上手につきあおう (5時間)

(2) 指導・支援の実際(4/5時間)

① 友達の話聞いて、リアクションをしよう	
＜ねらい＞ 友達の話の内容を聞き取り、うなずきや身振りを返すことができる。	
教師の主な発問	児童の様子 (○行動・発言や反応) (A)はA児
・順番にくじを引いて質問に答えましょう。話した人に、「いいね。」と言ったり、うなずいたり、リアクションをしましょう。 ・リアクションしてもらうと、どんな気持ちでしたか。 ・友達にリアクションをしていきましょう。	○一人ずつくじを引いて、読み上げる。 ・質問は「タケコプターがあったらどこに行きたい？」です。 ・「動物園。」→・うなずく (A) ・「いいね。」(ジェスチャーを返す) ・「僕も行きたいな。」 ・「世界中を回りたい。」 ・「おー、すごい。」(A) ・質問は「苦手な虫とその理由」です。 ・「カエル。ぴよんぴよん跳ぶとびっくりするから。」 ・「へえ、そうなんだ。」(A) ・「僕も同じだ。」 ・いい気持ちだった。 (A) ・うれしい。 ・やりたい。(A)

リアクションカード

② 「こんな時、どうする？」 解決する方法を考えよう	
＜ねらい＞ 相手の気持ちを考え、適切なやりとりの仕方について理解することができる。	
課題場面 勉強中、友達が筆箱を落とした。うるさいと思った。	
- ・「うるさい！」と、どなったら解決するかな。 - ・ロールプレイをしてみよう。 - ・ロールプレイをしてどう思いましたか。 - ・これからどうしたいですか。 - ・友達のことを考えた言葉を使っていきましょう。	- ・解決しない。(A) - ・嫌な気持ちになる。 - ・みんな暗い気分になる。 ○役を交代して「どなる」「我慢する」「お願いする」の3パターンを演じる。 - ・怒られると嫌な気持ちだった。(A) - ・怒られた時、暗い空気になった。 - ・怒られると悲しい。 - ・「しー」と言うのがよかった。 - ・「気を付けてね。」がよかった。 - ・わざとではないから、怒らない。 - ・わざとでないから、我慢する。(A) - ・やさしく「気を付けてね。」と話す。 ○プリントに自分の考えを書いて、一人ずつ発表をする。 - ・がんばりたい。 - ・忘れちゃうかも。 その時はカードを見る。(A)

ワークシート

こんな時どうする？カード

(3) 配慮事項

- ・一方的な話で終わらないように、リアクションを返す体験を通して、よりよいコミュニケーションにつながるようにした。授業後も確認することができるように、視覚的な補助教材として、リアクションカードを見えやすい場所に掲示した。
- ・教室で実際にあった場面を取り上げ、ロールプレイの中で相手の気持ちを考える活動をした。プラス的な表現、マイナス的な表現の違いを感じてもらい、適切な行動につなげていきたいと考えた。

3 評価

(1) 成果 (○)・課題 (▲)

- 日記発表や教科学習の振り返り発表の時に、発表者を見て聞き、うなずいたり、感じたことを伝えたりすることが少しずつできるようになってきた。
- 具体的な場面での対応を学習することで、友達への言葉かけが少しずつではあるがやわらかくなってきた。どんな言葉を使うのがいいのか忘れてしまった時は、児童の机の脇に下げたカードを見て、確かめる姿が見られるようになってきた。
- ▲理解力や経験の有無の違いから発表内容を共有できないことがあるので、教師が仲立ちして理解を助けたり、質問の仕方を指導したりする必要がある。

(2) 今後の取組み

- ・様々な状況別対応をイラストで表した「こんな時どうする？カード」を蓄積していく。カードは必要時に見ることができるようにする。生活の中で、友達に対して穏やかに話すことができた時には見逃さずに賞賛をして、定着を図っていきたい。
- ・本児が苦手とする聴覚からの理解を促すトレーニングや言葉の理解を広げる学習は、定期的に行っていきたい。

4 参考資料（文献、教材等）

文部科学省（平成30年3月）「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編

（幼稚部・小学部・中学部）」 開隆堂

下山直人：監修 全国特別支援学校知的障害教育校長会：編著（2018）

「知的障害特別支援学校の自立活動の指導」 ジアース教育新社

1 自立活動の流れ図 ※「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編（幼稚園・小学部・中学部）」（平成30年）参照

校種〔 小学校 （ 下学年 上学年 ） 中学校 〕

実 態 把 握	① 障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所やよさ、課題等について情報収集					
	・軽度な知的発達の遅れがある。 ・自宅から30分かけて登下校するなど体力があり、健康状態は良好である。 ・整理整頓が苦手で、ロッカーや机の中が常に乱雑で、提出物などの忘れ物も多い。 ・イライラした時は絵を描いたり、読書をしたりすることで気持ちをコントロールすることができる。 ・周囲に必要以上に気を遣い過ぎて、自分の気持ちを素直に伝えられないことがある。 ・特別支援学級の中では、よく気が利き、リーダー的な存在であるが、交流学級では、友達の輪に入っていくことが苦手である。 ・慣れた学習課題には集中して取り組むことができる。 ・走ることや器械体操は苦手になっているが、球技を得意としており、興味・関心がある。 ・両手を使った作業や指先を使った作業を大得意としており、興味・関心がある。 ・大勢の前で自分の考えを述べるのが苦手である。 ・普通高校への進学を希望している。					
	②-1 収集した情報（①）を自立活動の区分に即して整理する段階					
	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	・健康状態は良好で、生活のリズムは自立している。	・イライラした時の自分なりの解消法を持っている。	・集団になると自分から進んで輪の中に入っていくことが難しい。	・慣れた学習課題には集中して取り組むことができる。	・手先が器用である。 ・球技が得意である。	・大勢の前になると自分の考えを発表することが難しい。
	②-2 収集した情報（①）を学習上又は生活上の困難や、これまでの学習状況の視点から整理する段階					
	・特別支援学級の中では、学習に落ち着いて取り組めるが、交流学級での学習では、集団の輪に入っていくことができず、グループ学習では見ているだけになることがある。 ・周囲に必要以上に気を遣い過ぎて、自分の気持ちを素直に伝えられない時がある。 ・イライラした時は、クールダウンとして絵を描くことや読書をするを勧めると気持ちが落ち着く。					
	②-3 収集した情報（①）を卒業後の姿の観点から整理する段階					
	・卒業後、普通高校で学習や生活を送るために、自分から進んで集団の輪に入っていくこと。 ・円滑なコミュニケーションが成立するためのコミュニケーション手段を獲得し、良好な人間関係を構築できるようになること。 ・自信を持って、様々な相手に自分の気持ちを素直に伝えること。					

指導すべき課題の整理	③ ①をもとに②-1, ②-2, ②-3で整理した情報から課題を抽出する段階 ・集団の輪に自分から進んで入っていくことが苦手で、良好なコミュニケーションをとることが難しい。(人、コ) ・自分に自信を持って、様々な相手に自分の気持ちを素直に伝えることが難しい。(心、人)
	④ ③で整理した課題同士がどのように関連しているかを整理し、中心的な課題を導き出す段階 ・集団の中で活動できるようにするために、段階を踏んで、コミュニケーションの力を高めていく必要がある。 ・自分の苦手なことを少しずつ克服する経験を積むことで、自分に自信を持って周囲と良好な人間関係を築くことが必要である。

⑤ ④に基づき設定した指導目標（ねらい）を記す段階

課題同士の関係を整理する中で今指導すべき目標として	・集団の中で進んでコミュニケーションを図れるようにするために、自分に自信を持って、生活や学習に取り組むことができる。
---------------------------	--

⑥ ⑤を達成するために必要な項目を選定する段階

指導目標を達成するために必要な項目の選定	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
		(1) 情緒の安定に関すること	(4) 集団への参加の基礎に関すること			(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること

項目間の関連付け	⑦ 項目と項目を関連付ける際のポイント
	・自信がなく消極的であることから自信を持って取り組んだ経験を積むために、(心)(1)と人(4)と(身)(4)を関連付けて配慮事項として設定した指導内容が⑧アである。 ・安心できる学習集団の中で、自分の思いを伝えることができるようにするために、(人)(4)と(コ)(5)を関連付けて配慮事項として設定した指導内容が⑧イである。 ・交流学級での学習では緊張が強まり、コミュニケーションがうまくとれなくなることから、集団でのコミュニケーションを学ぶために、心(1)と人(4)を関連付けて配慮事項として設定した指導内容が⑧ウである。

⑧ 具体的な指導内容を設定する段階

選定した項目を関連付けて具体的な指導内容を設定	ア 苦手なことにも取り組んでみようと思うために、得意な運動を活動に取り入れ、段階的に少しずつ苦手な抵抗感のある活動に取り組む。	イ 状況に応じたコミュニケーションがとれるように、小集団で関わることで課題が達成できる学習に取り組む。	ウ 安心して集団の中で活動することができるよう、必要に応じた支援を求めながら、参加する経験を増やす。
-------------------------	---	---	--

2 実践事例

(1) 単元・題材名

「仲間と協力して、障害物を乗り越えよう」(指導内容ア)

(2) 指導・支援の実際

本実践は、本生徒の興味・関心のある「身体を動かすこと」を題材にして、小集団の中で、進んで活動に参加し、状況に応じたコミュニケーションを図ることを目的としている。比較的難易度の低い障害物から、仲間と協力しなければ乗り越えられない難易度の高い障害物をクリアする活動とし、課題に応じて段階的に変化できるよう場の設定を工夫した。また、乗り越えた時の達成感が味わえるような活動になるようにした。

本生徒の得意な体の動きである平均台を最初の課題とすることで、安心した気持ちの中で、自信を持って自分の動き方に着目し調整する姿が見られた。次の二人三脚では、仲間との意思疎通が上手くいかず、前へ進むことができない場面が見られたが何度か自分の気持ちを伝え、友達の意見を聞き、よりよい方法を仲間と考えていくうちにスムーズに前進できるようになった。その後いくつかの障害物をクリアした後、最後の難関である5人によるムカデ走では、最初は人の動きに合わせられずにいらいる場面も見られたが、仲間と声をかけ合うことでクリアし、達成感を得ることができた。

(3) 配慮事項

障害物が段階を追って難易度が高くなっていくように設定した。また、仲間と話し合ったり自分の気持ちを伝えたりしなければクリアできないような障害物を用意し、繰り返し関わる場を設定することで、乗り越えたあとは、達成感を得て、「仲間とよく話し合って、協力すれば良いことがある」という経験ができるようにした。

3 評価

(1) 成果(○)・課題(▲)

○実践を通して、当初は自信がなさそうだった生徒が、難しい障害物を段階的にクリアすることによって達成感を得て自信をつけた様子が見られた。

○丁寧に実態把握を行うことが、自立活動を通して生徒に力をつける上で重要であると実感した。生徒の強み弱みを分析して、興味のある活動を仕組むことが必要である。

▲上手くいかなかった場面を取り上げ、その場合どのように声がけすれば良いのか、臨機応変に教師が具体的に支援する場面も必要だった。

(2) 今後の取組み

来年度以降も、生徒の興味・関心に合わせて、一人でできる簡単な課題からコミュニケーションを取らなければクリアできない難しい課題へと発展していく題材を工夫していきたい。その際、教師が具体的に支援する場面をイメージしておきながら臨機応変に対応する必要がある。

4 参考資料(文献、教材等)

文献1)

三浦光哉編著(2020年)「本人参画型の『自立活動の個別の指導計画』理解度チェックと指導計画の様式」株式会社ジアース教育新社

校種〔 小学校 （ 下学年 上学年 ） 中学校 〕

1 児童の実態

本学級は、在籍がA男一人の知的障がい学級である。A男は軽度知的障がいの診断を受けている。日常生活を送る上で、着替えや食事、排泄等の身のまわりの基本的なことは自分ですることができる。しかし、靴の紐を結ぶ、ズボンが下がったら自分で気付いてズボンを上げることなどはできない。整理整頓が苦手で自分の物を自分で管理することができない。使ったものをそのままにするため、物がどこにいったのかわからなくなることが多い。自分に自信をもつことができず、自分を否定する言葉を言うことがある。自分の意見や気持ちを言葉で伝えることができない。誰に対しても友好的に接することができるが、情緒が安定しないときは交流学級の授業に参加できないことが多い。交流学級の友達とかかわりたい気持ちはあるが、自分への自信のなさから友達に声をかけることができないことが多い。どうしていいのかわからない時は、本人の意思にかかわらず、動けなくなることがある。好きなこと等でクールダウンできると、10分程度で体が動くようになる。

2 テーマ

自分に合ったコミュニケーションの方法を知り、他者とかかわる力を育てるための指導の工夫

3 育てたい資質・能力

本学習では、学習指導要領自立活動編の「3 人間関係の形成 （1）他者とかかわりの基礎に関すること」、「6 コミュニケーション （4）コミュニケーション手段の選択と活用に関すること」について指導する。「他者とかかわりの基礎に関すること」では、他者とかかわりをもちたいが、その方法が十分に身に付いていない児童の実態を踏まえ、担任や交流学級の児童など、身近な人との関係を少しずつ形成していくようなやりとりを指導する。言葉でのやりとりは難しいため、表情スタンプや拍手などのリアクションボタンを使用することで、自分の感情を表すことへのハードルを下げていく。「コミュニケーション手段の選択と活用に関すること」については、A男が好きなタブレットを使用し、落ち着くことができる場所（自分の学級）から、画面越しに安心して友達とかかわることができるようにする。コミュニケーションは、言葉だけでなく、表情や動き、タブレットの機能（リアクションボタン）など様々な方法があることを知り、自分に合ったものを選択することができることを指導する。様々な方法で他者とコミュニケーションをとることができる力をつけていきたい。

4 実践の内容・方法

- ① 帰りの会を、交流学級（5年生）と TEAMS を通して行う。交流学級の友達に声をかけたり、話をしたりすることができるように、友達との会話をサポートする。
- ② 「今日の振り返り」を担当と二人で行う。「今日楽しかったことは、～です。」「今日頑張ったことは、～です。」など話型を提示し、話しやすい環境を整える。交流学級の友達に話ができるようであればその都度声がけを行う。

- ③ 朝の会と帰りの会で、自分の気持ちに合った表情カードを提示する活動を行う。1日の心の変化を感じたり、自分の気持ちを振り返ったりすることができるようにする。表情カードを交流学級の友達にも見てもらうことで、今日の調子（気持ち）を知ってもらう機会にする。

5 成果（○）・課題（▲）

- 「画面越し」という状況が、A男にとっての「人とかかわるハードル」を下げてくれるため、交流学級の友達と楽しくかかわることができる時間が増えてきた。以前は、交流学級などの大勢の人がいる場所にいると10分ほどで疲れてしまい、すぐに自分の学級にもどってしまうことが多かった。TEAMSで画面を切り替え、疲れた時や動けなくなったときに自分のペースで休憩できることが、A男にとって安心できることがわかった。
- 帰りの会だけではなく、理科や総合など、交流できなかった教科もTEAMSで交流できるようになった。以前は、交流するかどうか尋ねると必ず「行きたくない。」と言っていた教科も、「TEAMSでならできそう。」「行く。ダメだったら（調子が悪かったら）TEAMSでやる。」など、自分で交流の方法を決めることができるようになった。実際に交流学級の教室に入ることができる回数も増えてきた。
- タブレットを交流学級に置くことで、A男に話しかけてくれる友達が増えてきた。「やっほー！」「今何してるの？」など、声をかけてくれることが多くなった。言葉だけでなく、表情スタンプでやりとりをしたり、文字や画像を送り合ったりすることで、これまでかかわりがなかった友達とも少しずつかかわることができるようになってきた。
- ▲突然話しかけられたり、どのように返していいのかわからない質問をされたときなどに、動けなくなったり、何も言葉を返せなかったりする 때가まだまだ多い。かかわり方も幼く、変な言葉で友達の気を引こうとしたり、何も言わずに画面からいなくなったりする等、不適切なかかわり方も多いため、メディアを扱う際のマナーと共に指導を続けていく。

校種〔 小学校 （ 下学年 上学年 ） 中学校 〕

1 児童の実態

6年A男 1名在籍。

学習面では、算数の学習に意欲的に取り組んでいる。特に、計算問題は進んで取り組む。学習した漢字は読むことができるが、書くことは苦手になっている。音読は、学校でも家庭でも進んで行っている。しかし、周りに気をとられずに課題に向かって集中して学習することや、正しい姿勢で椅子に座って学習することがなかなかできない。文字を書く時も、手に力を入れて形よく書くことを苦手としている。生活面では、交流学級の児童達と一緒に仲良く遊んだり、学習したりすることができる。委員会では、日常活動を中心に進んで取り組んでいる。しかし、身の周りの整理整頓や学習用具の管理ができないことがある。また、言葉が不明瞭なところがあり、定期的に山形県立こども医療療育センターで言語訓練を受けている。

2 テーマ

自己肯定感や意欲的に取り組む態度を育てるための指導

「指先を使って細かな動きをしよう」～日常生活の様々な場面において～

3 育てたい資質・能力

学習指導要領「自立活動」の、「5 身体の動き （3）日常生活に必要な基本動作に関すること」に関連する部分での、生活の中で必要な動作（手指の動き）ができるようにしていく。そのために、興味関心を持って取り組める素材を使って、段階的に難易度を上げながら継続的に取り組ませることを通して、手指の力や微細な動きを身に付けることができるようにしていく。さらに、鉛筆を正しく持つことを意識させることで、鉛筆を程良く動かしながら形を整えて文字が書けることに結び付けていきたい。これらの活動を通して、「やれた」「できた」という成功体験を積み重ね、自己肯定感や意欲的に取り組む態度を育てていきたい。また、児童にとって、抽象的な内容は理解しにくいので、生活に結び付いた具体的な活動を中心に据え、日常生活や社会生活に必要な技能や習慣を身に付けることができるようにしていきたい。

4 実践の内容・方法

（1）活動名

「いろいろな道具を使いこなそう」

（2）目標

- ・切る、つまむ、結ぶなどの活動を通して、指先の感覚を高めることができる。
- ・手を使った活動を繰り返し行うことで、手の巧緻性や握る力を高めることができる。
- ・両手の協応や目と手の協応とともに、正確性や速さ、持続性を高めることができる。

（3）活動内容と方法

- ・「線に沿って切ってみよう」 1／3（3時間扱い）

紙に描かれた正方形や長方形、三角形、台形、円、複合図形などの様々な図形や

キャラクターの絵を用意し、児童がはさみを使って、輪郭線に沿ってできるだけずれないように切る活動を行った。

・「うまかつかめるかな」 2 / 3

皿を2枚用意し、児童が箸を使って、大豆が入っていた皿から、入っていなかった隣の皿に移す活動を行った。大豆の次は、小豆、ビーズなどというように難易度を上げていった。所要時間も測るようにした。

・「ひもを結ぼう」 3 / 3

幅の違うひもを数種類用意し、児童は、本結びから練習し、次に蝶結びというように段階的に取り組んだ。ひもの長さも、長いものから短いものというように難易度を上げていった。

5 成果 (○)・課題 (▲)

- はさみを使った活動では、はさみを紙のどこに入れて切り始めたらよいのか、はさみの始点と終点を考えてから切り始めることで、輪郭線とのずれが小さくなった。
- 箸を使った活動では、時間を測ることでゲーム的な要素も加わり、児童は意欲的に取り組んでいた。今までつまむことができなかったものがつまめたり、いつもより速くできたりした時は達成感を味わいながら取り組むことができた。給食時の箸使いについても、以前より、箸でつかみ損ねる場面がほとんど見られなくなった。
- ひもを結ぶ活動では、長いひもに比べて、短いひもの方が結び終わるまで時間がかかる傾向があるが、ひもを曲げて輪になる部分を上手く作ることで、少しずつ短い時間で結ぶことができるようになった。
- この取り組みでの成果が、他の学習活動にも見られるようになった。図工での、自分の手をデッサンする課題では、目で自分の指の並びを確認し、鉛筆の筆圧も考えながら仕上げることができた。音楽では、始めリコーダーの運指が難しかったところが、少しずつスムーズに指を動かすことができるようになった。
- ▲はさみの持ち手と指の間隔がずれてくると、輪郭線とのずれが大きくなる傾向があった。同じ持ち方（指の入れ方）ができるような手立てが必要である。
- ▲箸は割り箸を使って活動させたが、生活上、滑りやすい箸（塗り箸など）を使う場面も出てくるので、使う道具のレパートリーを拡充させていきたい。
- ▲児童が履いている靴は靴ひもがあるタイプではなく、マジックテープ式の靴で、日常的に必要性がある環境にはないので、これからも折にふれて活動を行っていく必要がある。